

生徒それぞれのオーダーメイドな教育の促進に Google Workspace for Education と スタディサプリが力を発揮する

中高一貫の郁文館中学校・高等学校、郁文館グローバル高等学校、ID 学園高等学校の 4 校を運営する学校法人郁文館夢学園では、2015 年から Google Workspace for Education とスタディサプリを活用した ICT 教育を進めています。ICT 活用の目的や学園の目標、その取り組みの詳細、そしてこれまでに得られた成果や今後の展望について、ICT 教育を推進し、運用体制を構築してきたお二人の言葉をもとに紹介していきます。



学校法人郁文館夢学園

〒113-0023

東京都文京区向丘 2-19-1

<https://www.ikubunkan.ed.jp/>

東京都文京区に所在する学校法人。母体となった私立学校は 1889 年開設で、2021 年で創立 132 周年を数える。郁文館中学校、郁文館高校、郁文館グローバル高校の中学 1 校・普通科高校 2 校、および広域通信制・単位制高校 1 校の計 4 校を設置。学ぶ生徒数は合わせて約 1,700 人。「子どもたちの幸せのためだけに学校はある」という教育理念を掲げ、生徒個人個人に夢を持たせ、夢を追わせ、夢を叶えさせることを目的とした「夢教育」を実践する。



823 台

01

学園が掲げる“夢教育”を デジタル キャンパス化構想で追求

同学園は「子どもたちの幸せのためだけに学校はある」という理念があります。そして、名称に「夢」という言葉が入っていることからわかるように、生徒たちの夢の実現を教育目的に設定しています。言うまでもなく、夢はそこに“ある”ものではなく、自ら思い描き、そして実現していくものです。進路指導部長として、生徒たちが第一希望の道へ進むための仕組みづくりを担う高橋雄仁氏は、次のように語ります。

「本学園が推進する夢教育では、生徒一人ひとりに夢を持たせ、追わせ、叶えさせることを大切に考えています。ですから進路指導も、いわゆる“いい大学”に進学するというより、将来実現したい夢に向かってどういった大学に進むのが一番いいのか、その進路を見定めるサポートをするという考え方で臨んでいます」

同学園では、2015 年度から現在の Google Workspace for Education (以下、Google Workspace) と、スタディサプリ / スタディサプリ ENGLISH を導入しています。当時は、生徒たちが効率よく大切な学びを進められる自学自習ツールが不足してい

ることを課題に感じていたと、高橋氏は振り返ります。

「日頃の自学自習はもちろん、体調不良等で欠席した際にも学びを止めないことが大切です。それに加えて、授業展開の発展や、教員の業務量を削減して働き方を変えていくという視点からも、教育における ICT の利活用に関心を持ちました」

人材開発室長の藤井崇史氏は、続けてこう解説します。

「生徒たちは、それぞれの夢に向かって PDCA サイクルを回しています。そして、教員は生徒の目標設定や経過に合わせた学習プログラムの提示やフォローを行います。当然、生徒一人ひとり、

学校法人郁文館夢学園



進路指導部長
高橋 雄仁 氏

性格はもちろん夢の内容、到達方法は異なりますので、教員には将来を見据えて助言するための幅広い教養や創造力、コーチングスキルなど、高い能力が求められます。

人材開発室では教員育成のための研修を設計・運営していますが、同時に夢教育を底上げするための環境整備にも力を入れています。

その一つが、デジタルキャンパス化構想です。デジタル技術を活用して生徒たちの学力向上を実現するとともに、教員のアナログ的作業を大幅に削減することで、生徒と向き合う時間を創出します。また、生徒の夢や成績、面談記録等を集約した生徒カルテという教育データの一元管理と分析、有効活用を通して教師の伴走力を強化していきます。

ICT教材については、2015年度から様々なものを活用してきました。その中でも Google Workspace やスタディサプリは、本校の実現したい学びのあり方に対して機能性・拡張性がともに優れていることを大変評価しています」。

高橋氏は「例えば、Google Classroom で課題・資料の配布や

情報発信が行えること、Google フォームでアンケート集約や小テストを手軽に実施できることには魅力を感じています。またスタディサプリは、自学自習のツールとして大きな意義を感じています。いずれも、生徒にとってきわめて有益なツールであるというコンセンサスが教員の間で醸成されています。コストの低さとシステムに対する信頼感・安心感も大きな要素でした」と付け加えます。

学校法人郁文館夢学園



人材開発室長
藤井 崇史 氏

02

学力向上やコミュニケーション強化 教員のアナログ作業削減効果を実感

2015年度から、Google Workspace は全校の全学年、スタディサプリは高校2、3年とグローバル高校の全学年、またスタディサプリ ENGLISH は中学・高校の全学年とグローバル高校1年に導入しています。ちなみに端末に関しては、基本的に Chromebook を学校で一括手配し、各家庭に購入してもらう形を取っているとのことです。(2021年度に関しては台数確保の問題から一部 iPad を採用した学年があります)。

まず Google Workspace について、高橋氏は「各教科はもちろん、私が担当する進路指導でも、Google Classroom で高校3年向けに最新の進路情報を発信したり、Google フォームで意見を集約したりと、活用が進んでいます」と話します。

また、生徒が自発的に Google フォームでアンケートを作成し、自らのフォロワーに投げかけ回答を集約し、執筆した研究レポートを大学入試へ活用するといったケースも増えてきているそうです。

藤井氏も「Google Workspace によって、教員と生徒はもちろん生徒同士のコミュニケーションのスピードが加速しているように思います。本学園は探究学習にも力を入れており、Google Classroom 上で生徒同士が自身の研究テーマや研究の成果物を共有し合っています。そして、ドキュメント上でフィードバックが行われ、スプレッドシートにその経過が記録されていきます。オンライン

上のスピーディなコミュニケーションが、自らの探究テーマを深めるのに役立つとともに、オフラインでこそできる対話を活性化させているように感じました」と語ります。

一方、スタディサプリについては、基本的に全教科で小テストや宿題、あるいは自学自習向け教材として活用しているとのこと。高橋氏は、学習の幅を効率的・効果的に広げ、かつ各生徒の目標や進路に合わせて柔軟に学び続けられることがスタディサプリの良さであると評価します。

そして、アクティブラーニングにとっても有効との意見がありました。藤井氏は「私が担当する高校の社会では、テーマに関連する動画を予習復習はもちろん授業内でも活用しています。反転授業をやる際には、最初の10分で授業の重点テーマ部分を見せて、

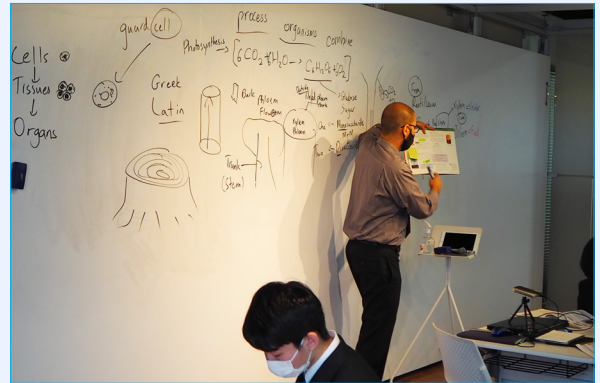


その後解説および対話、議論へ発展させていきます。その過程では『生徒に“気づき”をどれだけ与えられるか』『考えさせられる対話がどれだけできるか』を大事に展開していきます。こういった授業の形式に変えたことで、アクティブ ラーニングが効果的に機能するようになりました。実際に考査での論述問題の生徒解答や授業のコメントシートを見ると、テーマに基づきより深く考えられたものが増えたように思います。説明パートがパッケージ化されたサブリを活用することで、各回の授業において『やりたいこと』や『伝えたいこと』にフォーカスした授業構成にすることが可能です」と話します。

とりわけスタディサブリ ENGLISH の活用については、リスニングを中心に 4 技能が向上したことを多くの教員が実感しているとのことでした。2020 年度の例では、教員がリスニング教材を週 3 回の配信を続けました。学期末にテストを実施したところ、以前と比べてリスニング力が大きく伸びていたといいます。

また、生徒と教員が宿題や日記などをオンラインでやり取りする中で、コミュニケーションの深まりも強く感じているとのことでした。「2020 年春からの新型コロナウイルス感染症の影響下では、スタディサブリの動画はもちろん、さまざまな教材を PDF 化して Google Classroom で配信していました。オンライン授業においては 30 人のクラスを半分ずつに分け、教員と生徒がより密にコミュニケーションをとれる環境を意識していました」と高橋氏は話します。非対面でも学びを止めずに教育を継続できたことが生徒はもちろん保護者からも高く評価されたそうです。

また、「教材配信や課題回収、アンケート、保護者連絡など業務のデジタル化を進めました。結果、教員の事務作業にかけける時間を減らすことにつながり、その分を生徒との面談時間へ回せるようになりました。また、学園全体の IT リテラシーが高まる中で、生産性の向上にむけた取り組みも学園全体ではじまりました。働き方改革も、同時並行で進めています」と藤井氏は話します。



03

教員本来の役割である生徒と向き合う時間をデジタル技術の活用でさらに追求する

ICT 教育を進める中で、様々な定性的な変化と効果を多くの教員が実感していました。高橋氏は「今後、年度を通じて活用の頻度と学力向上の相関性を定量的に評価していきたい」と話します。

加えて、課題も見えてきているようです。スタディサブリを導入した当初は「動画より教員による授業のほうがわかりやすい」と話す生徒が多かったそうです。動画のみで授業を完結できるレベルまで教員も生徒も追いついていませんでした。しかし、その後の動画内容の質の向上や、再生速度調節など生徒が諸機能を使いこなせるようになったことで、そうした声は次第に減っていきました。

一方、こういった変化の中で、ファシリテーションやコーチングなどを含めた授業展開力が一層教員へ求められるようになっていったと藤井氏は指摘します。



「スタディサブリは『一般的な解説』という点において、ある程度完成された動画教材です。これを教員間で共通のシラバスの元で活用してきました。やってきた実感として、授業には教員の能力と個性が今まで以上に反映されるように感じます。例えば、教科書の

表層的な部分を説明するといった単調な授業であれば、スタディサブリで事足ります。ゆえに、そういう授業では生徒がノッてきません。教壇に教員が立つ意味を感じていないのではないのでしょうか。従って、スタディサブリを活用した授業をするのであれば、授業展開にこそ教員はこだわるべきです。いかに対話的に授業を組み立てられるか。生徒の主体性を引き出すべく、考えさせる問いを投げかけ、気づきを引き出せるか。盛り上げながら学び合う空気をつくれるか。こういった点で、『教える』以上の能力や、授業へのこだわりが今まで以上に求められる教材だとも思っています」

教員による差という部分では、かつては ICT ツールに詳しい教員のみが積極的に使う側面もあったといいます。前出のリスニング教材の配信も、当初は担当教員が当該学年のみで実施していました。その後、進路指導部や人材開発室が中心となり、活用の幅を広げていったそうです。

「活用に関して、これまでは教科担当者の裁量に依存していたため、一部でしか使われていませんでした。学園全体でツールをより効果的に活用するため、例えば宿題は必ずスタディサブリを使って出す、週に数回 Google Classroom で課題を配信する、といったルールを学年や教科の状況に合わせて整えました。また、職員会議などで教育効果を都度発表するようにしてきました」と高橋氏は

話します。

藤井氏は「人材開発室はその動きに連動し、ICT ツールの活用を推進する研修や勉強会を実施してきました。同時に、教員それぞれの ICT レベルに合わせたフォローアップの体制もつくりました。こういった取り組みの成果もあって、現在では多くの教員が当たり前のように ICT を活用しています」と付け加えます。

今後について、高橋氏は次のように語りました。

「教員の本質的な役割は、生徒一人ひとりの夢に合わせたコーチングだと考えています。デジタル教材により自分たちで学習を進められるようになれば、教員は深い部分の学習指導や生徒の夢につながる進路指導など、教員にしかできない指導に多くの時間を使えるようになります。これからも ICT を活用し、より質の高い教育を実現していく未来を描いていきます」。

藤井氏は「当学園はこれまで、理念に基づき子どもたちの幸せのために必要だと考えられることは、教育業界の常識に囚われることなく実行してきました。デジタル キャンパス化構想や学校全体での ICT 化もこの考えの延長線上にあります。子どもたちの人間力 / 学力 / グローバル力の向上、さらには、夢の実現に繋げるべく、デジタル キャンパス化を進めるとともに、運用体制をこれからも進化させていきたいと思います」と語ってくれました。



Google for Education

いつでも、どこでも、予算に応じて使える教育テクノロジーソリューションです。

Google for Education の特徴

- ☒ 簡単操作
- ☒ 手ごろな価格
- ☒ 高い汎用性
- ☒ 高い効果

chromebook

1

教育向けに設計され、授業向けに開発された軽量で耐久性の高い共有可能なノートパソコン

Google Workspace for Education

3

時間や場所を問わず学校全体で共同利用できるクラウド型教育プラットフォーム

Google Classroom

2

教師と児童生徒向けに構築された学習プラットフォーム

Chrome Education Upgrade

4

1 つの端末から同じドメインのすべての Chromebook を設定
シンプルなクラウド型管理コンソール

